

修士論文要旨

方言とそのインパクト——現代日本とエジプトの比較研究

シヤラフ・イスラム

言語は人々の日常生活に密接に繋がっている。さらに、地域の言葉である方言は、それぞれの土地ではなくてはならない毎日の暮らしの言葉である。つまり、方言は貴重な文化遺産であり、地域文化の象徴存在である。しかし、日本においては言語の統一化に伴い、特に若者に関しては標準語がベースとなり、方言の衰退が顕著である。一方でエジプトでは、伝統方言が継承される中で、方言差別による社会問題に直面している。

本論文は、現代日本とエジプトの文化的背景において方言がどのように使用され、社会や人々にどのようなインパクトを与えているかについて比較検証する。方言の変容とその社会的な影響に対する理解が、両国における言語状況の理解を深める手掛かりとなる。

これまでの日本とエジプトの言語に関する研究では、日本語とアラビア語方言に関する音声学からのアプローチなど、言語そのものの習得過程における指導法や詫びや依頼の表現の違いなどの研究が多く、学習者の母語がどういった特徴をもっているかを把握することの重要性を述べたり、エジプト人が詫びや依頼する際にはどのような発話傾向があったりするかなどについて考察されているが、日本とエジプトにおける方言の比較研究はなされていない。

本研究の特徴は、日本とエジプト両国において、フィールドワーク調査を行い、方言が国民生活に与える影響について焦点を当てることにある。本研究を通して、次の3つを明らかにしていきたい。1点目は、日本においては方言衰退、エジプトにおいては方言差別について現状を明らかにし、日本の歴史的背景とエジプトの現状を比較することで、解決策を見つけ出すことはできないか。2点目は、日本とエジプトにおける現代の若者は、どのような方言使用傾向にあるのか。3点目は、日本において過疎化が進み、農村地へ移住政策が盛んであり、移住者も増加傾向にある。方言は元々地域の所属感を表すものであったが、移住者に移住先の方言がどのような影響を与えているのか。これらを解明していくことで、方言が消滅の危機にある日本や方言が蔑視されているエジプトにおいて、方言の価値を再確認し、方言の保存と継承に必要な視点を提供したい。

本論は、序章、結論を含め6つの章からなる。第1章は、研究背景と研究目的について論じる。第2章は、方言と共同体について概観するために、文化的・言語的背景、言語使用の共通点と相違点を日本とエジプト両国について先行研究を整理する。第3章は、方言使用実態について日本とエジプト両国について先行研究から明らかにする。第4章は、本論の中核を担う方言が国民生活に与える影響についてフィールドワーク調査の内容を中心として、人間関係、仕事、教育の3つの視点から論述する。第5章は、現代の若者の方言について焦点を当て、日本とエジプトの人々の実態を明らかにし、今後の方言の在り方、継承の在り方について真髄に迫る。第6章では、本論を総括しまとめる。